

# 初年次教育としての「大学生活入門」

## ―法学部における実践報告―

法学部教授(法学部長) 斎藤 誠

### 1. はじめに

本稿は、法学部が平成18（2006）年度から実施している新カリキュラムにおいて導入した、初年次教育のための授業科目「大学生活入門」についての実践報告である。

法学部の新カリキュラムにおいて導入された重要な改革のひとつがガイダンス教育の充実であり、「大学生活入門」の新設はその具体化である。当時、「ガイダンス教育」という概念は必ずしも一般化していなかったが、われわれは、新入生のための大学生活全般にわたる入門教育のことを指すものとしてこの言葉を用いた。最近では、ほぼ同じ内容を表す概念として「初年次教育」という言葉が使われているため、以下ではこの用語を用いる。

用語はともかく、新入生のための大学生活全般にわたる入門教育をめざす授業科目としては、本学ではこの「大学生活入門」が最初のものである。本稿は、この授業科目の担当者である筆者がこの授業科目の内容および授業方法について紹介することを目的とする。そこから他の学部が初年次教育を考えるさいに多少なりとも参考にあるものがあればとの思いからである。

### 2. 「大学生活入門」の構想から実現まで

#### (1) 問題提起

法学部は、かなり早い時期から「1年生をどう教育するか」という問題にまじめに取り組んできた。いわゆる大綱化をうけて平成6（1994）年度から実施されたカリキュラムでは、法についてほとんど何も知らない新入生をいかにして専門教育へと導入させるかという観点から、全国的にもほとんど例を見ないコンセプトによる3つの授業科目を置き、一定の効果をあげてきた。

しかし、今回のカリキュラム改訂を審議した委員会において、「専門教育への導入だけでは不十分であり、そもそも大学生として一人前になるための導入教育をする授業科目が必要なのではないか」という提案があった。具体的には、大学での勉学についての意識づけ、ノートの取り方、本の読み方、レポートの書き方、図書館の利用法、ゼミ発表の仕方などを教える授業の必要性が話題となった。それまで、こうした教育は、1年後期におか

れた「基礎演習Ⅰ」において、各担当教員が、独自に、できる範囲で行ってきた。しかし、それを1年前期に1つの授業科目として統一的・組織的に行うべきだという提案である。

なぜそうした授業科目が必要なのかについては異なる意見があった。一方では、最近の学生の能力・資質の現実をふまえた「仕方ない対応として必要だ」という意見があり、他方では、現在の学生の能力・資質とは関係なく大学教育を効率よく進めるために「もともと必要なものだった」という意見もあった。しかし、いずれにせよ、すでにいくつかの大学における先行例があったことも幸いして、必要性についてはおおかたの理解をえることができた。

## (2) 構想と設計

つぎに、①名称およびカリキュラム上の位置づけ、②授業形態、③担当者、④教育内容・方法の詳細が問題となった。①については、「大学生活入門」という名称のもと2単位の教養教育科目（選択科目）の1つとして1年前期に開講することとした。ただし、できるだけ多くの新生が履修するよう履修指導することとした。②については、統一的・組織的教育との提案趣旨から、1人または2人といったできるだけ少ない教員が担当することとしながらも、1学年（約400名）1クラスといった大人数の授業はできるだけ避けることとした。③については、すでに専門導入科目の担当者として導入教育の経験をもっていること、初年次教育の必要性に理解を示していることなどを理由に、筆者が担当することとなった。④については、この授業科目の趣旨を十分にふまえることを条件に、担当者に一任された。また、担当者の希望によって、③については、1学年を2クラス（1～3グループと4～6グループ）に分けて行うこととした。

## (3) 履修登録・出席・単位修得の状況

次ページの表1は、導入初年度の2006年度と2007年度について、「大学生活入門」の履修・出席・単位修得の状況をまとめたものである。

まず、履修登録状況についてみると、上記のように「大学生活入門」は選択科目であるが、新生のほとんどはこの授業科目を履修登録しており、2006年度は新生401名のうち385名（登録率96%）が、2007年度は新生417名全員が登録をしている。この履修率の高さは、新生オリエンテーション期間中の履修指導によるところが大きい。

また、履修登録をした学生のほとんどは履修を最後まで継続している。2006年度では、履修登録者385名のうち373名が、2007年度においては履修登録者417名のうち410名が最終の試験を受けている。授業への出席率も高く、平均出席率は2006年度が93%で、2007年度は92%である。また、表にはないが無遅刻・無欠席の皆勤者は、2006年243名（履修登録

者の63%)、2007年度は255名(同61%)であった。出席率の高さは、後述のように、毎回出席を取りそれを成績評価に加えているという事情もあるが、学生の授業に対する関心の高さの表れでもある。

その結果、単位修得率も高い。成績評価の方法は、出席点(2006年度30点、2007年度20点)、課題提出点(2006年度、2007年度とも30点)、試験の点数(2006年度40点、2007年度50点)の合計としているが、2006年度は合格361名、不合格12名、放棄12名であり、2007年度は合格385名、不合格25名、放棄7名であった。登録者中の単位修得率は2006年度が94%、2007年度は92%ということになる。2006年より合格率がやや下がったのは、試験の点数の比重が大きくなり、出席点の比重が小さくなったことによる。

表1 「大学生活入門」の履修・出席・単位修得状況

	新入生	履修登録者	平均出席率	試験受験者	単位修得者	単位修得率
2006年度	401名	385名	93%	373名	361名	94%
2007年度	417名	417名	92%	410名	385名	92%

### 3. 授業内容・方法の構想

#### (1) 大学生活に何を含めるか

授業内容の構想にあたっては、2つのポイントがあった。第一は、「大学生活」ということで何を含めるか、という問題である。具体的には、勉学に関することが含まれることは当然としても、それに以外のこと(たとえば課外活動、日常生活、進路選択など)をどの程度に扱うかという問題である。けっきょく、「大学生活入門」では、勉学に関することを中心にしつつも、学生生活のそれ以外の部分にもかなり言及することにした。科目名称のとおり、大学生活全般に関わる内容としたのである。担当者としては、勉学に関すること6割、その他のこと4割と考えた。

その理由は大きく言って3つある。第一は、新入生が勉学以外のことも広く不安を感じているという現実である。法学部の新入生意識調査によると、大学生活への不安としては、確かに「講義についていけるか」とか「順調に進級・卒業ができるか」といった勉学に関するものが多いが、そのほかにも「親しい友人ができるか」「希望する就職ができるか」「きちんとした生活が送れるか」「大学の雰囲気になじめるか」といったことにかかなりの学生が不安を感じている。「大学生活入門」は、その現実に対応したものでなければならない。

第二の理由は、社会的要請である。さまざまな理由から、現在、大学には、勉学面以外での学生生活全般にわたる教育・指導が求められつつある。ボランティア教育やキャリア形成教育などは、その代表例である。従来は、こうした教育は、正課外・教室外で行われてきた。しかし、現在では、これを積極的にカリキュラムの中に取り入れ、正規の授業科目と結びつけていくことが課題となっている。「大学生活入門」は、この課題に応えるものでなければならない。

第三の理由は、学生に「学び」の意義を説くためには、勉学以外の学生生活の送り方と関連づけざるをえないということである。生活全般や生き方への言及なしに学びの意義は説得的に語れない。学びへの強い意識をもたないで入学してくる現在の大学生を相手にするわれわれ教員にとって、この点はとりわけ重要である。学生に充実した生のイメージ、たとえば自立的あるいは自律的に生きる、良くあるいは善く生きる、成長あるいは発達しながら生きるといったイメージを喚起すること、しかもそれを日常生活の具体的な問題にそくしながら実感させること、そして、そうした生き方をするために学びがどんな意義をもつかを説くことは、今日の学生の教育には欠かせない要素となっているように思われる。もちろん、ひとつ間違えば主観的な人生訓、「お説教」でしかないこの仕事は、筆者を含めたほとんどの教員にとっては明らかに荷の重い、そして気が重いものである。しかし、にもかかわらず、学生に「何をどう学ぶか」を説くには「なぜ学ぶか」を説くことは避けて通れない。「大学生活入門」は、この課題に応えないわけにはいかない。

## (2) 知識・技能・意欲

授業内容を構想するうえでの第二のポイントは、知識の伝達、技能の習得、意欲の喚起のどこに重点を置くかであった。結論からいえば、これら3つの要素をできるだけバランスよく取り込むことにした。たしかに、授業クラスが200名前後の受講者からなることを考えたとき、技能習得のための訓練にはおのずと限界があるだろうし、意欲の喚起は、上記のように、ひとつ間違えば教員のひとりよがりにも陥るおそれがある。

しかし、にもかかわらず、「新生を早く一人前の大学生にする」という、この「大学生活入門」の設置趣旨からすれば、知識伝達だけでは不十分であり、大学で使う技能の習得、充実した大学生活を送るための意識づけが不可欠である。ノートの取り方、情報の集め方、原稿用紙の使い方、レポートの書き方、試験答案の書き方などは実際にできるように練習させなければならないし、失意のもとにある不本意入学者には希望と励ましを与え、学びの準備ができていない者には学びの意義と楽しさを説き、学びのイメージについて偏りがある者にはそれを直し、自分らしさや将来の夢がないと悩む者にはそんな心配は無用

だと伝えなければならない。もちろん、すべてがうまくいくわけではない。しかし、できる限りのことはしなければならない。

さらに、知識・技能・意欲の3要素のバランスをとることは、授業に対する学生の関心を持続させるための方策としても有効であると考えられた。この授業科目を構想するにあたって、筆者は、当時担当していたゼミの学生（1・2年生）にこの授業科目の趣旨を話し、「大学生活入門」にどんなことを期待するかについて意見を聞いた。学生が興味を示す内容はかなり異なっていたが、知識・技能・意欲の3要素のどれかに授業内容を偏らせることには反対意見が多かった。どれかに偏ったのでは飽きるというのである。確かに、「大学生活入門」という1つの授業科目で、多様な新入生の多様な期待に対応するには、いろいろな要素を入れておいた方がよい。

### (3) 教科書・参考書・プリント教材

教科書として高橋三郎・新田光子著『大学生入門 [改訂版]』（世界思想社、2006年）を指定した。それは授業の構想と本書の内容が一致したからではない。多くの本を参考にしたが、授業構想と一致するものはなかった。したがって、授業は、自作のプリント教材を作ってすすめるしかないと判断していた。しかし、部分的にでも利用できるものがあれば、それを教科書として指定するのが、教えるほうにとっても学生にとってもよいと考えた。本書を選んだのは、取り上げられている内容、書き方、ボリューム、価格などを総合的に判断しての結果である。実際、この教科書は学生にとっても興味深いあるいは便利な内容だったようである。しかし、この教科書が授業内容の全部あるいは大部分をカバーしているわけでもなく、授業がこの教科書に即して進められるわけでもないことはシラバスに明記し、授業の冒頭でも説明した。

学生への参考文献として今年度は次の6つを挙げておいた。（ただし、最後のものはシラバスにおいてではなく、授業の中で追加した。）

- 飯田史彦『大学で何をどう学ぶか』（PHP文庫、2001年）
- 藤田哲也『大学基礎講座』（北大路書店、2002年）
- 森靖男『大学生の学習テクニック』（大月書店、1995年）
- 佐藤望（編著）他『アカデミック・スキルズ』（慶応義塾大学出版会、2006年）
- 戸田山和久『論文の教室』（日本放送出版協会、2002年）
- 学習技術研究会（編著）『知へのステップー大学生からのスタディ・スキルズ』（くろしお出版、2002年）

これらは、大学生活を広く捉えるというこの授業との関連では明らかに偏りがある。つまり、これらの内容のほとんどは、大学での勉学に関することだからである。しかし、勉学以外の大学生生活についての入門書は、全く知らないわけではなかったが、内容的に自信をもってすすめられるものはなかった。今後そうしたものが見つければ追加していくつもりである。

また、これらの参考書はすべて、授業のなかでその内容の一部を利用したものである。授業を構想する段階で参考にはしたが、授業で一回も取り上げなかったものは参考文献には挙げなかった。

ちなみに、新入生に大学における「教科書」や「参考書」の意味が高校までといかに違うのかを説明することは重要である。教科書を指定しておきながら、それをほとんど使わない先生がいるのはなぜか、教科書を一生懸命に勉強してきても試験でよい成績がとれないことがあるのはなぜか、授業と少ししか関係しない内容の本が参考書になるのはなぜか。学生がこうした疑問をもつまえに、説明をしておいたほうがよい。

授業では、担当者が作ったプリントを教材として利用することとした。ただし、毎回ていねいな授業用レジュメを作るわけではない。学生にノートをとる練習をさせるために、あえてレジュメを準備しないこともある。しかし、授業にとって重要な説明部分には必ずプリントを用いた。配付枚数は少ないときで2枚、多いときで5枚、授業全体では32枚(2007年度)である。授業の準備としては、このプリント教材の作成に最も時間を費やした。学生には、「これから折にふれて読み直せるように、きちんとファイルしておく」ことを求めた。同時に、試験を「持ち込み一切可」とし、試験準備として配布プリントの整理が不可欠であることを伝えたため、少なくとも試験にはほとんどの学生がファイルされたプリントを持ち込んでいた。

#### (4) 授業計画

資料1は、2007年度の授業計画である。若干の変更はあるが、基本的な部分を含めほとんど初年度のものと同じである。

これを見ればわかるように、1コマの授業は4単位と「きょうのコラム」に5分割され、その内容が決められている。授業をいくつかの単元に分割して計画することは、担当者が導入教育での経験にふまえて考えたもので、学生の集中力を維持するには有効である。また、授業では、授業の前半・後半の間に5分の休憩を入れている。

さらに、実際の授業では、本題に入る前に「前回授業での質問への解答」の紹介と解説(後述)があり、最後には「出席カード」への記入(後述)がある。したがって、実際の

## 【資料1】 「大学生活入門」(2007年度) 授業計画

### <第1講>

- (1) この授業科目の目的について
- (2) 成績評価の方法について
  - きょうのコラム：新聞を読もう
- (3) 大学の教員について
- (4) 大学の授業について

### <第2講>

- (1) 授業への取り組みについて
- (2) 大学の成績評価・試験について
  - きょうのコラム：大学の先生との接し方
- (3) コピー機・ケータイ・パソコン
- (4) 書籍・雑誌の入手方法

### <第3講>

- (1) 図書館の利用①
- (2) 図書館の利用②
  - きょうのコラム：不本意入学のきみに
- (3) 情報収集の方法①
- (4) 情報収集の方法②

### <第4講>

- (1) 本の読み方(説明)
- (2) 本の読み方(練習)
  - きょうのコラム：食生活・健康管理をさぼるな
- (3) ノートのとり方(説明①)
- (4) ノートのとり方(説明②)

### <第5講>

- (1) ノートのとり方(練習①：「ほんとうの自分」とは何か)
- (2) ノートのとり方(練習②：上の続き)
  - きょうのコラム：アルバイトと学生生活
- (3) ノートのとり方(練習③：模倣と個性)
- (4) ノートのとり方(練習④：上の続き)

### <第6講>

- (1) ノートのとり方(練習⑤：コミュニケーション能力とは)
- (2) ノートのとり方(練習⑥：上の続き)
  - きょうのコラム：異文化交流のすすめ
- (3) ノートのとり方(練習⑦：事実と意見)
- (4) ノートのとり方(練習⑧：上の続き)

### <第7講>

- (1) 原稿用紙の使い方(説明)
- (2) 原稿用紙の使い方(練習)
  - きょうのコラム：失敗のすすめ
- (3) 文章の書き方(説明)
- (4) 文章の書き方(練習)

### <第8講>

- (1) レポートの書き方(説明①)
- (2) レポートの書き方(説明②)
  - きょうのコラム：世話役のすすめ
- (3) レポートの書き方(練習①：わたしの高校生活)
- (4) レポートの書き方(練習②：上の続き)

### <第9講>

- (1) レポートの書き方(説明③)
- (2) レポートの書き方(説明④)
  - きょうのコラム：ボランティアのすすめ
- (3) レポートの書き方(練習③：ニート問題について)
- (4) レポートの書き方(練習④：上の続き)

### <第10講>

- (1) ゼミ発表の仕方
- (2) レジュメの作り方(説明)
  - きょうのコラム：価値としての自律
- (3) レジュメの作り方(練習①：裁判員制度について)
- (4) レジュメの作り方(練習②：上の続き)

### <第11講>

- (1) 就職への準備①
- (2) 就職への準備②
  - きょうのコラム：自律を妨げる現代社会
- (3) 試験答案の書き方(説明①)
- (4) 試験答案の書き方(練習①)

### <第12講>

- (1) 試験答案の書き方(説明②)
- (2) 試験答案の書き方(練習②)
  - きょうのコラム：自律のための学びと行動
- (3) 試験について
- (4) 授業評価

授業は、「解答解説」(約10分) → 「単元(1)」「単元(2)」(それぞれ15分) → 「休憩」(5分) → 「きょうのコラム」(約10分) → 「単元(3)」「単元(4)」(それぞれ15分) → 「出席カード」(5分) という順序で進められる。この進行予定は、あらかじめ学生には伝えられており、その結果、担当者にはかなり厳密な時間管理が求められる。授業開始後40分が近づくと、学生たちの視線は教室前方の電波時計に集まる。

授業(1)～(4)の単元は勉学に関する知識伝達・技能習得が中心であるのに対して、「きょうのコラム」は勉学以外の面での意識づけが中心である。両者の区別を明確にし、「きょうのコラム」の内容は担当者からの個人的メッセージであること、したがって別の意見がありうることを強調したかったからである。また、ノートのとり方やレポートの書き方のなかでも、「練習」の題材とすることで、メッセージ性の強いテーマを扱うことができた。

「説明」よりも「練習」に多くの時間を割いているのもこの授業計画の特徴である。とはいっても、授業のなかで実際に練習できる時間は多くないし、大教室なので一人ひとりまでは目が届かない。初年度(昨年度は応募者がいなかったため採用できなかった)は大学院学生1名をティーチングアシスタントとして採用し、教室内を巡回しながら学生からの質問等に対応させた。しかし、基本的アカデミック・スキルを身につけさせるために、いかに実のある練習をさせるかが、この授業にとって最も重要な課題となった。

#### 4. 授業の実際

##### (1) 出席カードの利用

授業では毎回出席をとるが、「出席カード」はA5判のものを自前で作り、「1. 授業での質問への解答」と「2. 授業への感想、意見、質問」の欄を設けた。この2つの欄への記入のために、上記のように、授業時間の最後の5分が充てられた。

1の欄は、担当教員がその日の授業に関することを1つ質問し、学生は授業でとったノート(ときには教科書や配布プリント)をみて答えをその欄に書くためのものである。これによって、ノートのとり方、文章の書き方、試験答案の書き方の総合練習ができる。学生は、いいノートをとることがいかに重要かを知り、内容的には理解していてもそれを答案として文章化するのがいかに難しいかを知る。

2の欄は、学生の授業に対する関心の方向と程度を知るうえで重要である。とくに、授業のなかの「意識の喚起」に関する部分の反応については、この欄への回答が参考になる。もちろん、何も書かない、あるいはほとんど何も書かない学生もいるが、その割合は1割にも満たなかった。また、その割合は授業期間の初期から終期にかけて増えることはなく、

むしろ記述量は増えていった。

## (2) 質問への解答についての解説

授業の冒頭には、前回授業で出席カードに書いた質問への解答についての解説がある。解説にはプリントを用いる。資料2は、ある授業で用いたプリントである。プリントは、①質問とそれに対する答え方についての解説、②学生の解答例とその修正、③それぞれの解答の評価から構成されている。

まず、質問に対する解答には、適切な答え方があることを示す。この点は、とくに試験答案の書き方としてひじょうに重要であることを強調する。表2は、授業がすでに何回か進んでからのものであり、毎回の注意をうけて、学生はこの点をかなり意識して解答していることがわかる。この成果は明らかで、最終試験で「……はなぜか。」との質問に、8割以上の学生は「……だからである。」のように質問に対応した形式で答えている。

つぎに、学生の解答例の提示とその修正は、個別的な添削ができないことへの代替措置である。一つひとつの修正についての説明する時間はないが、学生に具体的修正を示すことで、正確な文章表現への注意を喚起できる。当然ながら、学生はどのような解答が取り上げられるか、それがどのように修正・評価されるのかにかなり強い関心を抱いている。解答に授業後すぐに目を通し、次週のプリントで取り上げるものを選び、修正・評価することは、確かに手間がかかるが、学生に授業への緊張感を持続させるためには有効であるように思われる。

最後に、解答への評価を点数で示している。これは、担当教員が解答にどの程度の期待水準をもっているかを示すためのものである。新生は、どの程度の解答を書けば合格点に達するのか、あるいは高い評価を受けられるのかについて分からない。たとえあくまで担当教員の基準でしかないにせよ、その基準を具体的に示されることは、学生にとって有益である。そして、多くの学生は現在の自分の解答の水準ではあまり高い評価を得られないことを自覚できる。

## (3) 課題レポート

この授業では3回のレポート提出を課している。それぞれ第4回、第8回、第10回の授業で課し、2～3週間後に提出させた。毎回、受講者の約9割が提出している。回収は授業中ではなく、学務係窓口の協力をえている。

課題の内容は、授業内容と関連させられており、達成目標はそれぞれ異なる。最初の課題は、「狸狽事件」「アグネス論争」「椎名裁定」のいずれか（どれになるかは学生番号によって決まる）について説明する文を300字以内で原稿用紙に書くというものである。こ

ここでは、①調べる、②まとめる、③原稿用紙に書く、の3つが達成目標となる。学生番号ごとに課題を違えるのは、学生に自分で調べさせるための（あまり効果のない？）苦肉の策である。

この課題を出した段階では、授業で②と③についての説明はまだしていない。授業担当者としては、ともかくまず書かせ、それをふまえて②や③を説明し、説明をふまえてさらに別の課題を書かせるのがよいのではないかと考えたためである。実際、最初と2番目のレポートを比較すると、②と③については明らかに改善されているものが多い。しかし、この方法については、学生から「最初のレポートを出す前に②や③についてどんな点に注意すればよいのかを話してほしい」との声も強い。

2つ目の課題は、「荻谷剛彦のゆとり教育批判」「高橋伸夫の成果主義批判」「香山リカのふちナショナリズム批判」のいずれか（どれになるかは学生番号によって決まる）について、説明する文を700字以内で原稿用紙に書くというものである。上記のように、基本的には最初の課題の発展であるが、今回は参考文献を示すことが義務づけられる。

ちなみに、引用・参考の文献表示義務の意識づけと文献表記法の習得は、この授業だけではかなり難しいことがわかった。最終試験問題の1つとして、ある本の奥付を見て参考文献として表記する問題を2年連続で出しているが、正答率は3割程度と低い。さまざまな授業で、レポートを課すたびに注意を喚起する必要があるだろう。

3つ目の課題は、「配付資料A～Dを用い、ノート問題に関する報告型レポート（内容自由）を書く。字数は1500字以内。」というものである。すでに授業では、レポートについて、3タイプ（報告型・評論型・論証型）とそれぞれを書くさいの型とポイントについて説明がなされている。この課題は、その説明をふまえ、与えられた資料を用いて報告型レポートを実際に書いてみるというものである。提出されたうち、こちらの期待水準に達していると評価されたもの（20点満点の15点以上）が5割強であり、ほぼ達しているもの（14点）を含めると8割をこえる。

#### (4) 試験

資料3は、今年度の試験問題の1つである。上記のように、授業は1学年を2つのクラスに分けて行われており、試験が実施される時間が異なるため、それぞれのクラス用に別の試験問題を作らなければならない。とはいっても、問題の出し方は同じであり、内容まで同じ問題もかなりある。

100点満点での評価の50点分（初年度は40点分）がこの試験による。試験は「持ち込み一切可」とした。授業でとったノートや配布されたプリントをいかに利用できるかをみる

**【資料2】 前回授業での質問への解答（紹介と評価）**

質問：ノートを取り方について（授業で取り上げた）3人に共通する考え方は何ですか。



- 答え方：① 3人に共通するのは ~ という考え方である。  
 ② ~ という考え方は3人に共通している。  
 ③ 3人に共通する考え方として ~ がある。

<解答例>

- (A) この3人に共通した考え方とは、ノートは後から見るため（に取るの）であり、小・中・高の（ときの）ようにただ板書する（板書を写す）だけではだめだ、という考え方である。
- (B) ノートを取り方について、3人に共通した考え方として（とは）、授業中はよく聞き、授業の要点をメモし、授業の後でまとめる（という）ことである。
- (C) ノートを取り方に関して3人に共通する考え方は、あとから利用できるノートを作成する（しなければならない）ということです。
- (D) 3人の著者に共通しているのは、高校までの（、）板書を写すだけのノートの取り方ではなく（不十分であり）、見るだけでなく（授業中）聞いたこともノートに取る（必要がある）ということ（である）。
- (E) 3人の先生に共通した考え方は、「講義中、先生の話をよく聞く」ということです（である）。重要だと思ったことはメモを取り、話をよく聞き、理解する（しなければならない）という考え方が共通している。
- (F) ノートは後から見てわかるようにとらなければ意味がない。また、授業中に先生の話聞くことが大切である。（この2つの点が3人に共通した考え方である）
- (G) 私は、3人に共通している考えは、「ノートは後から見るためのもの」であるということだと思います。森先生、藤田先生が書かれたようには教科書にその事ははっきり書いていないが、試験前のノートのコピーの話のところから、2人と同じことを言っているのだと思いました。



3人に共通している考えは、「ノートは後から見るもの」だということである。確かに、森と藤田の文章とは異なり教科書にはその点がはっきり書かれていないが、試験前のノートのコピーについての記述から、教科書の著者も2人と同じ意見であると考えてよいからである。

評価項目	A	B	C	D	E	F	G
理由の説明として適切か（7点）	5	3	5	5	3	5	6
明快な説明文になっているか（3点）	1	2	2	1	2	1	2
合計	6	5	7	6	5	6	8

ための試験をしたかったからである。

問題1は「授業内容との一致・不一致」を聞いている。しかも、(2)を除くと、かならずしも明確な答えがあるわけではない。授業では(1)(3)(4)(5)について「そうではない」面を強調しており、その理由も説明しているので、それを書いてもらえばよいのだが、そう受け取らなかったからといって完全に誤っているとはいえない。したがって、(1)(3)(4)(5)を「○」とした場合でもある程度の点数を認めるという方法をとった。

問題2は授業で習った技能の応用問題であり、授業で扱ったものをそのまま出題したものではない。予想以上にできなかったのは、本の奥付をみて文献名を書く(2)の問題であり、文献表示の方法を理解している答えは2割程度しかなかった。逆に予想以上にできていたのは(4)のパラグラフ・ライティングに関する問題である。トピック・センテンスを最初にもってくるという原則は、半分以上の学生には理解されていたようである。また、(5)についても、答案の半分以上は、結論→理由(→補足)という書き方を意識していた。

問題3はニート論に関する論述問題である。ニートについては、すでに課題レポートで出されたテーマであり、問題となっている主張については、すでに知っていることを前提にしている。むしろ、「…について論じなさい」という問題への解答の書き方ができるかをみようというものである。授業では、問題の趣旨説明→論点提示→自分の意見→その理由づけという順に書くように教えているが、1年生にとってはかなり難しい応用問題だったようである。満足すべき答案はきわめて少なかった。

試験の成績は、50点満点で30点台が75%と圧倒的に多く、40点以上が10%、29点以下が15%であった。したがって、全体としては、試験ではそれほど大きな差はつかなかった。

## 5. 学生の反応

### (1) 9項目での授業評価

昨年度の授業の最終回に行った「授業改善のためのアンケート」の結果から、この授業に対する学生の反応をみておく。回答者は363名で履修登録者417名の87%にあたる。

まず、表2は、9つの項目について、A(強くそう思う)～E(まったくそうは思わない)の5段階で評価してもらった回答分布である。また、表の右端欄には、A～Eをそれぞれ5～1点で点数化したときの平均点を出している。これをみると、授業に対する総合評価ともいえる「授業は全体的にみて良いものだった」の平均点は4.20であった。とりたてて高い数字ではないが、それほど低い数字でもない。

つぎに各項目別にみると「授業内容は役に立つものだった」「授業を担当した教員は熱

### 【資料3】 「大学生活入門」試験問題

1. 次の(1)～(5)の文について、授業での内容と一致するものには○、一致しないものには×をつけなさい。  
また、×のときは、その理由を簡潔に書きなさい。
  - (1) 自分が大学で教えてもらっている教員と街で会ったときは、すすんで挨拶するのが礼儀である。
  - (2) 本学の図書館では、学生は、必要な手続きをすれば、閉架書庫に入ることができる。
  - (3) コミュニケーションにおいて最も重要なことは、明快で論理的な言葉を使うことである。
  - (4) 「論証型」のレポートでは、「問い」→「論証」→「結論」という順番で書き進んでいくのがよい。
  - (5) 「ジョハリの窓」は、「ほんとうの自分」を見つけるための手がかりを示唆している。
2. 次の(1)～(5)の問いに答えなさい。
  - (1) 「報告によると、事故の責任は運転手にある」という文は、「事実としての情報」ですか、「意見としての情報」ですか。
  - (2) 右ページの「資料1」(省略)の本をレポートの参考文献として表記しなさい。
  - (3) 右ページの「資料2」(省略)の文を、原稿用紙に横書きにしなさい。
  - (4) 右ページの「資料3」(省略)の文について、パラグラフ・ライティングの考え方にしたがって文の順番を入れ替え、表現・表記で不適切な部分を直しなさい。
  - (5) 「大学生は裁判員になれないというのは本当ですか」という質問に答えなさい。
3. 「ニートは単なる若年求職無業者にすぎない」という考え方について論じなさい。

心だった」の2項目での平均点は4.5以上と高い。授業内容が役に立つとの評価は、この授業科目の設置趣旨からすれば、一応の目的を果たしているといえよう。「授業のねらいは明確だった」「授業はわかりやすいものだった」「授業の進め方は工夫されたものだった」「授業内容は濃いものであった」の4項目の平均点は4.0以上4.5未満である。担当者とすれば、かなり工夫をした授業を行ったつもりであるが、学生からは熱心さほどには高い評価を得ていないこともわかった。

平均点が4.0に達しなかった項目は2つあり、「授業内容は考えさせられるものだった」が3.97で、「授業は自分にとっては楽しいものだった」が3.57であった。「考えさせられる」という項目は、この授業における意識づけの要素に対する反応をみようとしたものであるが、結果としては、高い評価とはならなかった。授業の楽しさの対する評価の低さは、やや意外であると同時に納得できる面もある。というのも、学生からすれば、毎回授業の最後には授業内容についての質問があり、それに対する解答を書かなければならないし、課題も3回提出させられるわけで、決して気楽に聴講していればよいという授業ではないからである。加えて、後で見ると、授業の楽しさを減じた要因として、教室の狭さとそこからくる席の確保の大変さ、あるいは換気の悪さなどといった教室環境の悪さがあった

のかもしれない。

表2 「大学生活入門」授業評価の結果

項目	A(=5)	B(=4)	C(=3)	D(=2)	E(=1)	合計	平均
ねらいの明確さ	192	138	30	2	1	363	4.43
進め方の工夫	143	155	57	7	1	363	4.19
わかりやすさ	164	149	41	5	4	363	4.28
内容の濃さ	148	143	56	13	3	363	4.16
役に立つ内容	244	97	13	6	3	363	4.58
考えさせられる内容	120	140	80	17	6	363	3.97
教員の熱心さ	220	111	28	3	1	363	4.50
楽しさ	65	145	103	33	17	363	3.57
全体として	143	162	48	7	3	363	4.20

## (2) 授業で改善すべき点

「この授業で改善した方がよいと思われること」の自由記述欄にはアンケートの回答者363名のうち133名が146件について回答している。最も多いのは「教室が狭い」という苦情で49件に達している。受講者が210名前後に定員220名とほとんど余裕のない教室を使用したことが原因である。これと関連して、「教室の換気が悪い」4件、「席をとるのが大変だった」3件、「次の授業との入れ替え時に混雑した」3件などの苦情もあった。

次に多いのは、配付するプリントに関するものであり、「配付するプリントの量が多すぎる」とするものが14件、「配付方法の改善を」求めるものが5件、その他が5件あった。プリントの量については、上記のように、12回の授業で30枚弱であり、それほど多いとは考えていなかったもので、やや意外であった。配付方法についても、それほど問題があるとは思えない。しかし、プリントをあらかじめ教材用小冊子としてまとめ、配付しておく必要性を検討するきっかけになるかもしれない。

3番目に多いのは板書に関するものである。「板書をていねいに」が8件、「もっと板書を多く」が6件である。板書をあまりていねいにしないのは、一部は担当教員の個人的特徴であり、一部はこの授業科目のねらいのひとつであるノートを取るための訓練のためである。しかし、いまの学生に判読できない字を書かないような注意は必要である。

同趣旨で5件以上挙げられているのはこれだけであるが、「主観的意見が多い」という意見が4件あることは注目される。授業の中に個人的メッセージをどの程度含めるべきかに

ついてはかなり考えたすえの授業内容ではあったが、この4名にとってはとても鼻についたということであろう。また、「学生をおどかすような発言が多い」「学生に対する皮肉や悪い部分の指摘が多い」「さまざまな事情の学生に配慮した発言を」といった指摘も1~2件ずつあった。こうした意見は、思っているよりも書くこと自体に勇気を要することであるとすれば、同様に感じている学生が潜在的にはもっと多いのかもしれない。しかし、具体的になにに関することなのか、自分で思い当たらない。いずれにせよ新入生を対象にする授業では、言葉の選び方に細心の注意が必要である。

### (3) 授業で印象に残っていること

「この授業を受けて印象に残っていること」の自由記述欄には223名（回答者の61%）が回答し、56名は2件以上をあげている。

最も多いのは「レポートの書き方が役立った」の41件である。このほか役立ったとして多くあげられているのは、「ノートの取り方」の16件と「レジュメの作り方」の12件であり、この3つに集中している。

次に多いのが「授業の最後の質問への解答」に関するもので22件あった。内容的には、たいへんさを指摘するものと効果・効用を指摘するものが半分ずつであった。それに対して、「課題レポート」についての回答は少なかった。授業全体についての感想に言及した回答としては、「役に立つ」「ためになる」「わかりやすい」「教師が熱心」がそれぞれ5~6件ずつあった。

「今日のコラム」が印象に残っていると回答も20件と多かった。そのほかにも、今日のコラムで扱ったテーマをあげる回答は多かった。主なものとしては、「ほんとうの自分」「個性」「自分探し」に関するもの16件、「小宇宙のなかで、手厚い庇護をうけながら、サービスの消費者として育てられてきた」今日の若者論に関するもの12件、若者の「自律」に関するもの11件である。そのほかに「大学生活をどう送ればよいのか」を考えるのにためになった趣旨の回答も13件あった。こうしてみると、前述のように、担当教員からのメッセージを「主観の押し付け」と感じる学生がいる一方、それに強く印象づけられた学生も多くいたといえる。

担当教員の「体験談」「昔話」「雑談」が印象に残っているという回答も21件あった。授業担当者としては単なる雑談をしたつもりはなく、説明をわかりやすくするために具体例に言及したつもりであるが、その具体例だけが説明の文脈から切り離されて学生の記憶に残るということなのであろう。

## 6. 今後の課題

### (1) 有効性の検証

担当教員の実感からしても、受講した学生の反応からしても、初年次教育としての「大学生活入門」は決して全く無駄な試みではない。学生は、授業を通じて、授業の目的である大学生活に必要な知識・技能・意識を多少なりとも獲得していることは確かだからである。しかし、どの程度有効な試みであるかについては、なお慎重に見定めなければならない。そのためには、この授業で獲得したことが、学生のその後の大学生活においてどの程度活用され続けるかが検証されなければならない。

その点についてはまだ何もなされていない。確かに、一部の教員から肯定的な情報は入っている。それによると、1年後期に開講されている「基礎演習Ⅰ」では、レジュメの作り方や報告の仕方において「大学生活入門」がなかったときとくらべると、明らかに改善がみられるという。また別の教員からは「授業でノートをとろうとしない学生が減ったように思われる」とか「レポート提出で、原稿用紙の変な使い方が減っているような気がする」という声も聞かれる。しかし、多くは感想の域を出ていない。確かなデータを得るためには、組織的な調査を行うことが必要であろうが、そのための具体的構想はまだない。

### (2) 有効活用のための方策

有効性の検証とともに必要なのが、有効活用のためのフォローアップ、つまり、「大学生活入門」で習ったことを、他の授業の中で引き続き生かせるような仕組みづくりである。これができないと、「大学生活入門」で習ったことは、1つの授業科目で習ったことで終わってしまう。この点に関しては、2つのポイントがあると思われる。

第一は、「大学生活入門」の教材を、散逸しにくく、いつでも再利用可能なものとするという点である。その点からすると、毎回プリントを配付するという現在のやり方をなるべく早く改め、この授業のための教科書（的なるもの）を作ることが求められる。これについては、授業はつねに「ライブ」でありたいという思い、教科書は授業のライブ性を妨げるのではという懸念もあるが、やはり、一冊に綴じられていることの効用は大きいと考えるべきであろう。

第二は、他の教員が「大学生活入門」の授業内容を十分に理解し、その成果を生かすような授業を行うという点である。法学部では、1・2年生を対象にした演習科目「基礎演習Ⅰ」（1年後期）と「基礎演習Ⅱ」（2年前期）があるが、これら演習担当者が「大学生活入門」との連続性を意識することが特に重要となろう。この点でも、現状は不十分である。なかには演習参加者に「大学生活入門」の教材を必携としている教員、「大学生活入

門」の授業内容との連携をはかろうとしている教員もいるが、ほとんどの教員はそもそもそうしたことにあまり関心をもっていない。こうした現状を改善することは、学部内のFD活動の重要なテーマとなりうると考えられる。

### (3) 担当者と支援体制

どこの大学・学部においても、初年次教育の最大の悩みは、良質な授業担当者をどう確保するかである。大学教員には初年次教育の専門家はいない。そのため、しばしば、担当者を大学以外に求めようとする。たしかに、授業内容を限定すれば、それは可能であろうし、有効であろう。しかし、「大学生活入門」のように多岐にわたる内容を盛り込んだ授業は、学外者には無理なように思われる。けっきょく、それぞれの大学の教員の誰かが担当するしかない。

しかも、授業の改善という点からすれば、少なくとも数年間は継続して同じ担当者であることが望ましい。専門家でない教員がこの種の授業を改善していくには、時間がかかるからである。筆者も、あと2～3年続ければ授業はもっと良くなると考えている。しかし、同時に、この授業の担当者はできることなら30歳代後半から40歳代の教員が望ましいのではないかという思いもある。というのも、この種の授業では、新生が先輩の大学教員から話を聴くという関係が望ましいにもかかわらず、新生にとって50歳代半ばの教員は別世界に生きる老人であり、何らかの精神的つながりを感じる先輩ではないからである。現に、筆者が授業で、新生にとって何らかの参考になればとの思いから語る体験談は、かなりの部分で「昔話」として聞かれているにすぎない。

それはともかく、この種の授業科目の継続的担当は、教員にとって大きな負担となる。担当者の実感としては、専門教育の講義や演習担当にくらべ数倍のエネルギーを必要とする。したがって、初年次教育を「持続可能な」ものとするためには、教員の負担を減らすための支援体制が必要である。授業運営やプリント配付・出席カード整理などの作業について、TAによる支援は不可欠である。さらに、学生からの疑問・質問への対応については、部分的にはTAによる支援が有効であろう。

教員が独自に作る教材については、資金的・人的援助があれば助かる。また、参考書として定評のある何冊かの書籍については、1学年分を大学がまとめて購入して各学生に貸与し、1年終了時に返却してもらい次の新生に貸与するという仕組みができないかを検討してもらいたい。これが実現されれば、新生全員が、とりあえず1年間は教師の薦める参考書をいつでも利用できるからである。もし、学生が必要を感じた場合には、あとは自分で買えばよい。

#### (4) 全学的課題としての初年次教育

初年次教育をどのように構想・実施するかは、本学にとって、これからの大きな課題となる。選択肢は大きく分けて3つある。第一は、すべてを各学部学科の判断にゆだねるやり方、第二は、全学共通の枠組みをつくり実施については各学部学科にゆだねるやり方、そして第三は、枠組みだけでなく実施についても全学的責任体制をとるやり方である。ちなみに、筆者の意見は、第一のやり方には反対であり、第二と第三を折衷した次の5つにまとめられる。

- ① すべての学科に教養教育科目の一つとして「大学生活入門」(2単位)をおく。
- ② 各学科はその担当者(人数は学科ごとに異なってよい)を決める。
- ③ 各学科の担当者は「初年次教育担当者会」を組織し、定期的に研究会を行う。
- ④ 具体的教育内容は③の「担当者会」での議論をふまえ、各学科が決める。
- ⑤ 大学は、③の「担当者会」及び研修会に対して財政的・事務的補助を行う。

教養教育のあり方に関する全学的検討のなかで取り扱われるべき事項であろうが、できるだけ早急に結論を出す必要があるように思われる。

#### 〈参考文献〉

私立大学連盟初年次教育研究分科会編『初年次教育の組織的展開に向けて』(社団法人私立大学連盟、2007年)